

大山崎竹林ボランティア

「地道な竹林整備と不要竹の有効活用」



大山崎竹林ボランティア
会長
室崎 秀男さん

Case1 大山崎竹林ボランティア

活動は、毎月第2・第4回の午前中。午前9時に集合して体操で体をほぐしたあと、整備契約を交わしている竹林に入り、不要竹の伐採作業などに汗を流します。山頂近くの竹林で伐採した竹は、持って降りるのが困難なため、積み上げて自然に腐るのを待ちます。ふもと付近の竹林では、伐採した竹を『竹工房』に持って帰ります。

『竹工房』は、山崎聖天のそばにある竹林ボランティアの活動拠点。「大半の竹はここで焼却処分しますが、状態の良い竹は残して竹細工の材料にしています。できるだけ燃やす量を少なくして、竹を有効利用できるように努めているんです。」

ここで作られる竹細工は多種多様。ひしゃく、一輪差し、つくねセット、ビールジョッキなどの日用品、竹トンボやでんでん太鼓、竹ぼっくり、竹笛などのおもちゃ、動物たちのミニチュアの置物など。また、毎年末には正月用青竹の即売会を開催。ここで販売されるミニ門松は、町外から買いに来るお客さんも多い人気商品です。

今年の夏には、すす竹を作るための窯も完成しました。レンガでできた中央の窯で火を焚き、左右につなげたドラム缶の中に煙を流して、その中に入れた竹をいぶす作りになっています。「すす竹は、竹を煙で長時間いぶして真黒にしたものです。製品に独特の味が出るとともに、時間経過による変色や腐敗を抑えることができます。」

夏場は山頂から山裾に向けて風が吹くため、付近の方に迷惑をかけないようにということで、まだ稼働待ちの状態。風向きが変わる秋以降に稼働する予定です。そして、なんとこの窯も会員さんによる手作りです。「会員の中に、長年建築関係の仕事をしていた方がいますので、その方の主導で、レンガと山土とドラム缶で作りました。さまざまな仕事をしてきた会員が、それぞれのスキルを生かして活躍できるというのも、このボランティアの楽しいところですね。」

竹林ボランティアの皆さんが目指すもの。それは、天王山に登るハイカーや観光客に、気持ちいい自然を味わって

もらうことです。「観光客の方から『随分きれいな森になったね』と声をかけてもらうことがあります。そんなときは、やっつけて良かったと感じますね。また、このボランティアをしているおかげで地域の小・中学生との交流を持つ機会も多く、子どもたちから元気を分けてもらっています。」

精神的に活動しているものの、今抱える一番の問題は、メンバーの高齢化と会員不足だと室崎さんは話します。「会員は現在32人います。でも、毎回の活動に集まるのはだいたい15人ほど。一方、天王山には広大な竹林が広がっており、この人数で竹林を整備し続けるのは難しいというのが

実状です。」
また、会員の9割は60歳以上。山頂付近で作業をするときには、登るだけでもかなりの体力を要します。「できれば若い人に力を貸してほしいですね。『荷が欲しい、竹資材が欲しい』など動機は問いません。女性ももちろん大歓迎です。」とのこと。あなたも一度、体験参加してみませんか？ お問い合わせは室崎さん（☎9577-6852）まで。

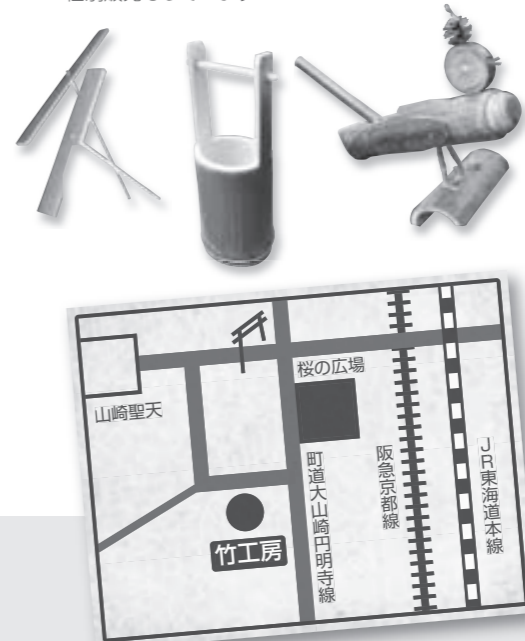


①竹工房の入り口。工房を囲む竹垣も、伐採した不要竹で作られています
②すす竹を作る窯。稼働すれば、竹細工製品にさらにバリエーションが増えます
③不要竹の焼却は必ず人がつきっきりで行います



竹工房の中は結構な広さ。作業場では、皆さん手慣れた手つきで作業に打ち込んでいます

竹細工の一部を紹介します。右から鳥の置物、一輪差し、竹トンボ。通常は、おおよまぎ産業まつりなどの催しの際に販売。毎月第2・第4回の午前中に、竹工房（下記MAP参照）で個別販売もしています



SUNTORY

「豊かな地下水を育む安全な森を」

サントリーホールディングス株式会社 エコ戦略本部部長
シニアスペシャリスト
山田 健さん



Case3 サントリーホールディングス株式会社

サントリーの工場は、いつも地下水の豊富な場所に建っています。

「弊社では、天然水や清涼飲料はもちろん、ビールやウイスキーの仕込みにも地下水を使っています。地下水を涵養してくれる森を守るのは、慈善などではなく、企業の生命線を守るための当然の活動だと考えています。」

工場で汲み上げている水量以上の地下水を森で育む。平成15年に熊本県の阿蘇で幕を開けた『サントリー天然水の森』は、現在では全国9都府県約3,100ヘクタールにまで広がっています。目標は約7,000ヘクタール。まだまだ道半ばですが、今年中にも5,000ヘクタールを超える予定です。

その2年後に始まった天王山での活動。天王山周辺森林整備推進協議会が主体となって進めるため、サントリー独自の『天然水の森』には分類されていませんが、水源涵養機能の高い豊かな森を作るといふ本質は同じです。「地下水を育むために一番大切なのは、豊かな森のフカフカな土壌です。フカフカな土壌は、



①竹林整備に汗を流す社員の皆さん。竹林の状態に応じて、その場所に最も適した整備を施します
②松は尾根筋などの痩せた土地を好む樹種。土地が肥えてくると逆に弱ってしまうため、地表にたまった腐植層の掻き取り作業が欠かせません

スポンジのような役割を果たし、降った雨をいったん蓄えて、さらに深いところまで浸透させてくれます。深い地層にまで届いた水は、大地の中をゆっくりと流れていく間にきれいにろ過され、清冽な天然水に磨き上げられていくわけです。」

ところが、日本の山の現状は、理想とはかけ離れています。手入れ不足で荒れた杉やヒノキの人工林では、林内が

真っ暗になって草も生えませんが、そのため、雨のたびに土が流れ、保水力がみるみる失われていきます。そして、ここ天王山では、竹林の拡大が最大の課題だと山田さんは話します。「竹は、網目状に根を張り巡らすので、一見災害に強そうですが、山崩れを防ぐ杭になるような深い根がないため、実際には土砂災害を起こしやすいのです。特に急斜面の竹は問題です。いったん崩れてしまえば、貴重な土壌も一気に失われてしまいます。また、水をたくさん吸うので、地下水も少なくなってしまう。そういう場所を、元の雑木林に戻すのが最大のテーマですね。」

ほかに松枯れ対策や、コナラやクヌギ、カシなどを枯らすカシノナガキイムシ対策など、問題は山積しています。「でも、山を守る活動は、眉をしかめながらではなく、いきません。問題意識はきちんと共有しながら、地元の皆さんや、子どもたち、そして社員ボランティアの皆さんと一緒に、楽しみながら進めていくのが、成功への最大のコツだと思っています。」

KDDI

「参加者自身が楽しみながら森林整備」

KDDI株式会社関西総支社
管理部管理グループリーダー
向井 崇浩さん



Case2 KDDI株式会社

和歌山県が進める『企業の森』活動。企業などが、社会活動の一環として森林保全活動に取り組む事業です。向井さんは平成19年に行われた、この『企業の森』の説明会に参加。「森に着くまで何時間もバスに揺られ、挙句、雨が降る中での活動。でも、ほとんどの参加者がアンケートで楽しかったと回答していました。」という某企業の活動報告に興味を引かれました。「CSR（企業の社会的責任）と、社員の心の充足を兼ねた取り組みができるかもしれない。」翌年、KDDIの森林整備活動は始まりました。

活動場所は「活動に従事した人が、後々も気軽に足を運べるような立地」ということで、大阪から交通の便の良い天王山に決まりました。

活動に参加するのは社員とその家族の皆さん。「酒解神社さんが所有する森林で、不要木の伐採や植樹を行っています。植樹する木は地元の意見を参考にしており、今後は天王山に自生するものも選んでいきます。一昨年は山桜とカエデを、昨年はツバキとサカキの苗木を植えました。」

リサイクルもKDDIの森林整備の大きな活動の柱となっています。「伐採した竹を山から降ろし、固形燃料に加工して再利用しています。今後は、竹だけでなくシイの老木も何らかの形で再利用できないか考えているのですが、なにせ大木なので、いかにして山から降ろすかが当面の問題です。」

第1回の活動後、参加者からアンケートを取りました。「山登りがしんどかった」という意見も多岐にわたる中、「作業が楽しかった」と答えた人の割合は、なんと100%でした。「参加者は本当に作業を楽しんでいるようでした。終わりの時間になっても作業をやめようとしないう人もいたくらいです。」

今後の課題は、新しい参加者を確保することだと向井さんは話します。「基本的に、午前中に森林整備活動をした後、午後にはハイキングや竹の工作など、家族で楽しめる企画を組んでいます。参加者が飽きないような工夫をしながら、今後も取り組みを進めていきたいです。」

いただきました。「森林整備というのは、結果が出るまでに時間がかかるもの。これからも、地元の意向に沿って、楽しく続けていきたいですね。参加者自身が楽しむことが、長く続ける秘訣だと思います。将来、私たちの取り組みが実を結び、天王山の森が、地元の方やハイカーの方に喜んでもらえるような、きれいな森になれば嬉しいですね。」



①伐採した竹を、山から降ろすための集積場に運びます。竹はストーブの燃料などに使われるペレットという固形燃料に加工されます
②お父さん、お母さんと一緒に参加した子どもたちも、のこぎりを手にカ一杯お手伝い

さまざまな形で天王山の森と親しみ
豊かな自然とのふれあいを満喫している人たちがいます。
自然とのふれあいは日々の暮らしで疲れた心に
安らぎと潤いを与えてくれます。

森に親しむ



春は野イチゴ採り、夏は小川でカニ探し。「あの崖の上には何があるかな?」「その池には竜がいるかも」先生の声に、好奇心いっぱい山に登る子どもたち。

大山崎町立各保育所では、保育の一環で日常的に天王山に登ります。乳児も例外ではなく、乳母車で山のふもとまで行き、森の中を散歩します。単に山に登るというのではなく、「く」を探しに行こう」「ごっこをしよう」と、先生も子どもたちを盛り上げるのが

上手。木にロープを結んで作る簡易ブランコも、子どもたちに人気です。

山道を歩くには、しっかりと踏んばらないといけないため、体操だけでは鍛えられない足腰の強さが身につきます。他府県の保育所から視察に来た保育士さんが「子どもたちの身のこなしがとても軽やか。山道でもこけないですね。」と驚いたそう。

今日も、天王山では、子どもたちが目を輝かせながら元気に遊んでいます。

自然の中でのびのび保育



①急な下り坂は、お尻でズリズリ…。でも落ち葉がフカフカで痛くない ②小川で小さなカニを発見!

しじゅうから、こげら、めじろ、ほととぎす…。天王山で観察できる野鳥は、およそ30種類にも上ります。8月を除く毎月第1回に開催されている探鳥会。参加者は、双眼鏡を手に天王山のふもとを歩きます。

『カブトムシの森』計画。放置されていた森の一角を昔のような雑木林に戻し、カブトムシやクワガタが集まる森に作り変えようという、町立各小学校の取り組みです。4年生のときに天王山で拾ったどんぐり(クヌギ、コナラ)を、手作りの竹ポットで苗まで育て、5年生で天王山に植樹。6年生時に苗木周辺の雑草刈りを行うという、3年計画の環境学習です。木の成長を見るために、授業に関係なく山に登る子ども

趣味の一つです。

探鳥会では、餌をまいて鳥をおびき寄せたり、巣に近づいて写真を撮ったりすることはありません。あくまでも遠くから双眼鏡で鳥を眺めるだけ。鳥の生活に影響を及ぼさないように、話し声は小さく、観察が終わるとすぐに移動します。

興味のある方は参加してみたい? JR宝寺踏切西側に午前9時集合(申込不要)。お問い合わせは森さん(☎955-3378)まで。

月に1度の野鳥観察



①アサヒビール大山崎山荘美術館付近から御茶屋池のあたりまでを約3時間かけて歩きます ②しじゅうから(写真提供:みずま工房)

「自然と触れ合うと心が豊かになる気がします。山登りの達成感も味わえて、すこく気持ちいいですよ。」

大山崎小字早稲田にお住まいの上田さんファミリーは、一博さん、麻理子さんご夫婦と、3歳になる双子の美友ちゃん、真央ちゃんの4人家族。天気の良い休みの日には、水筒やお弁当を持って天王山に登ります。「どんぐり拾った」「きのこ見つけた」子どもたちにとっては、目に映るすべてのものが新鮮なようです。親子で手をつなぎ、虫や木の実、花を見つめるたびに足を止め、ゆっくりと登っていきます。「山では、見て、聞いて、触って、いろいろな経験をすることが出来ます。いつも親子一緒に楽しみながら登っています。」と話す麻理子さんのお勧めの季節は秋。地面に落ち葉が積もり、まるで黄色いじゅうたんを敷いたようになるそう。季節の移り変わりに敏感になれるのも、山登りの魅力の一つです。

るそうで、子どもたちの木に対する愛着は相当なもの。竹に負けず、大きく元気に育つてほしい」これは、子どもたち全員に共通する思いでしょう。この取り組みは毎年、次の4年生へと引き継がれています。

「カブトムシの森」づくり



①校内の一角で育てられているどんぐりの苗。子どもたちが順番で水やりをしています ②天王山中の斜面に穴を掘り、竹ポットごと苗を植えます。竹の根が邪魔をして、これが結構大変な作業 ③誰が植えた木か分かるように、苗木の横に名前を書いた立て札を立てています

家族でぶらりハイキング



小さなきのこを発見! この日は、ほかにもカマキリやトカゲ、ムカデにも遭遇しました